

# 西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化 ー2つの動機に基づく待遇化プロセスー

鴨井 修平（日本学術振興会特別研究員-PD（国立国語研究所））

## Grammaticalization of Aspect Markers in Western Japanese :The Treatmentization Process Based on Two Motives

KAMOI Shuhei (JSPS Research Fellow-PD (NINJAL))

### 要旨・既発表の有無

文法化の一方向性より、より低い階層にある語彙的要素は、より高い階層にある文法的要素に変化するということは自明である。一方、文法化はなぜ生じるのかという問題については研究が少ない。中国語の持続形式「着(ZHE)」は、事実確認を標示するムード形式に文法化している（沈 2008）。また、西日本諸方言の持続形式「ヨル(-*jor*-）」も、証拠性を標示するムード形式に文法化している（工藤 2014）。これらのムード化は、TAMの階層構造に基づけば、順当な文法化であると言える。しかし、近畿中央方言の持続形式「ヨル(-*jor*-）」は、卑属性を標示する待遇形式に文法化している（井上 1998）。ここで、なぜ近畿中央方言では、ムード化ではなく待遇化が生じたのかという問題が生じる。本研究では、持続形式の待遇化は、①形式の機能重複、②形式のランキング、という2つの動機に基づいて生じるという仮説を提案する。また、文法化の動機の相違によって文法化の内容が分岐するという可能性について考える。

本発表は、鴨井修平 (2023)「西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化ー2つの動機に基づく待遇化プロセスー」（同志社大学博士論文）を要約した内容である。

### 1. 研究背景

文法化において、アスペクトを標示する形式（アスペクト形式）は、ムードを標示する形式（ムード形式）に向かって変化していくという一方向性がある。この一方向性は、図1に示すようなTAM (Tense, Aspect, Mood)の階層構造に基づいている。

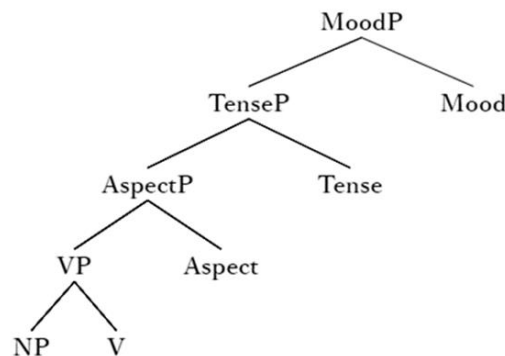


図1 TAMの階層構造

図1より、ムードは、テンス・アスペクトよりも高い階層にあることが分かる。文法化の研

究では、より低い階層にある語彙的要素は、より高い階層にある文法的要素に変化するということが解明されている。一方、文法化はなぜ生じるのかという問題については研究が少ないが、文法化の動機を解明することは、言語研究における重要課題のひとつである。(cf. Hopper & Traugott 1993, Bybee et al. 1994)

### 1.1. 中国語におけるアスペクト形式の文法化

中国語のアスペクト形式「着 (ZHE)」には、結果相 (resultative)を標示する ZHE1 と進行相 (progressive)を標示する ZHE2 の 2 形式が存在する<sup>1</sup>。(1)は、中国語北方方言に所属する晋語平遥方言の話者による発話例である。

- (1) a. uΛ<sup>23</sup>-teia<sup>13</sup>=tiΛ<sup>54</sup> xur<sup>13</sup>-tsΛ<sup>23</sup> tsuΛ<sup>54</sup>-tiΛ<sup>54</sup> tɿŋ<sup>13</sup>=liΛ<sup>23</sup>. / \*tsuΛ<sup>54</sup> tɿŋ<sup>13</sup>=tiΛ<sup>54</sup>=liΛ<sup>23</sup>.  
 3SG=GEN house tern-on-ZHE1 light=SFP / tern-on light=ZHE2=SFP  
 「彼の家には電気が点いている。」  
 b. uΛ<sup>23</sup>-teia<sup>13</sup> tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>32</sup> xuan<sup>35</sup>=tiΛ<sup>54</sup>=liΛ<sup>23</sup>. / \*tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>32</sup>-tiΛ<sup>54</sup> xuan<sup>35</sup>=liΛ<sup>23</sup>.  
 3SG eat food=ZHE2=SFP / eat-ZHE1 food=SFP  
 「彼はご飯を食べている。」

(1a)と(1b)は、動詞の後に生起する ZHE1 と動詞句の後に生起する ZHE2 は、結果相と進行相を区別するということを示している。(沈 2008: 224-226) ZHE1 と ZHE2 のアスペクト機能における相違のように、一方の形式にある機能が、他方の形式にない場合、両形式は機能的に対立していると言える。本研究では、これを「機能対立」と呼ぶ。

中原官話蒲県方言の ZHE にも ZHE1 と ZHE2 の 2 形式が存在するが、両形式のアスペクト機能には曖昧性がある。(2)は、蒲県方言の話者による発話例である。

- (2) a. t<sup>h</sup>a<sup>51</sup> xa<sup>33</sup> k<sup>h</sup>ai<sup>51</sup>-tɕə me<sup>13</sup>=li. / #k<sup>h</sup>ai<sup>51</sup> me<sup>13</sup>=tɕə=li.  
 3SG house open-ZHE1 door=SFP / open door=ZHE2=SFP  
 「彼の家はドアが開いている。」  
 b. t<sup>h</sup>a<sup>51</sup> tɕəŋ<sup>33</sup> tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>51</sup>-tɕə fæ<sup>33</sup>=li. / #tɕ<sup>h</sup>Λ<sup>51</sup> fæ<sup>33</sup>=tɕə=li.  
 3SG just eat-ZHE1 food=SFP / eat food=ZHE2=SFP  
 「彼はご飯を食べている。」

(2a)と(2b)は、ZHE1 と ZHE2 は、結果相と進行相を標示するということを示している。ZHE1 と ZHE2 のアスペクト機能における曖昧性のように、一方の形式にある機能が、他方の形式にもある場合、両形式は機能的に重複していると言える。本研究では、これを「機能重複」と呼ぶ。ただし、ZHE2 は、聞き手に対する注意喚起も同時に標示するため、語用論的には ZHE1 と対立している。(沈 2008: 226-228)

ZHE1 と ZHE2 の機能対立は、平遥方言よりも蒲県方言の方が曖昧であるが、それと並行的に蒲県方言の ZHE2 には新たに事実確認 (confirmative)のムード機能が生じている。(3)は、

<sup>1</sup> 沈 (2008)では、「状態持続」、「動作持続」という用語が使用されている。本研究では、議論の便宜上、結果状態の持続性に関わるアスペクトには「結果相」、動作過程や変化過程の持続性に関わるアスペクトには「進行相」という用語を統一的使用する。

蒲県方言の話者、(4)は、平遥方言の話者による発話例である。

- (3) tɕə<sup>51</sup> ua<sup>13</sup> tʰiɛ<sup>11</sup> ɣuəʔ<sup>51</sup>=tɕə=li.  
this child listen denotation=ZHE2=SFP  
「この子は言うことをよく聞いてくれるんだ。」

- (4) \*tɕaŋ<sup>13</sup>-saŋ<sup>13</sup> tʰiŋ<sup>13</sup> suΛ<sup>23</sup>=tiΛ<sup>54</sup>=liΛ<sup>23</sup>.  
Zhan-san listen denotation=ZHE2=SFP  
「張三は言うことをよく聞いてくれるんだ。」

(3)と(4)は、蒲県方言の ZHE2 は、事実確認を標示するということを示している。このような蒲県方言における ZHE2 のムード機能は、ZHE1 と ZHE2 の機能対立が明確である平遥方言の ZHE2 からは観察されないため、ZHE2 の文法化の動機は、ZHE1 との機能重複であると考えられる。(沈 2008: 228-229)

機能重複によるアスペクト形式の文法化は、北京語の ZHE によっても支持されている。北京語の ZHE にも ZHE1 と ZHE2 の 2 形式が存在するが、ZHE1 が結果相と進行相を標示するのに対して、ZHE2 はいずれのアスペクトも標示しない。(5)は、北京語の話者による発話例である。

- (5) a. tʰa<sup>55</sup> teia<sup>55</sup> tian<sup>214</sup>-tɕɿ tɕɿ<sup>55</sup>=nɿ. / \*tian<sup>214</sup> tɕɿ<sup>55</sup>=tɕɿ-nɿ.  
3SG home tern-on-ZHE1 light=SFP / tern-on light=ZHE2-SFP  
「彼の家には電気が点いている。」  
b. tʰa<sup>55</sup> tɕɿŋ<sup>51</sup> tɕʰi<sup>55</sup>-tɕɿ fan<sup>51</sup>=nɿ. / \*tɕʰi<sup>55</sup> fan<sup>51</sup>=tɕɿ-nɿ.  
3SG just eat-ZHE1 food=SFP / eat food=ZHE2-SFP  
「彼はご飯を食べている。」

(5a)と(5b)は、ZHE1 は、進行相と結果相を標示するということを示している。一方、アスペクト機能のない ZHE2 は、文末助詞「呢 (-nɿ)」と複合し、事実確認を標示する。(6)は、北京語の話者による発話例である。

- (6) tɕɿ<sup>51</sup> xai<sup>35</sup>-tsɿ tʰiŋ<sup>55</sup> ɣuo<sup>55</sup>=tɕɿ-nɿ.  
this child listen denotation=ZHE2-SFP  
「この子は言うことをよく聞いてくれるんだ。」

(6)は、ZHE2 は、事実確認を標示するためのムード形式であるということを示している。(沈 2008: 229-230)

沈 (2008)は、中国語におけるアスペクト形式の文法化を次のように整理している。まず、平遥方言の現象が示すように、ZHE1 と ZHE2 は、機能対立を成すアスペクト形式であった。次に、蒲県方言の現象が示すように、ZHE1 と ZHE2 の間で機能重複が生じ、ZHE2 の方が事実確認のムード機能を獲得した。そして、北京語の現象が示すように、ムード機能を獲得した ZHE2 はアスペクト機能を失い、ムード形式として定着した。つまり、ZHE2 は、2 つのアスペクト形式が 1 つのアスペクトを標示するという余剰性の解消 (Martinet 1962)を動

機に文法化したということである。

## 1.2. 日本語におけるアスペクト形式の文法化

西日本諸方言のアスペクト形式には、進行相を標示する YORU と結果相を標示する TORU の2形式が存在する<sup>2</sup>。(7)は、愛媛県宇和島市方言の話者による発話例である。

- (7) a. 猫が障子、破りよる。おっばらいさい。  
「猫が障子（を）（今）破っている。追っ払いなさい。」  
b. 猫が障子、破っとる。張り替えないけん。  
「猫が障子（を）（既に）破っている。張り替えないといけない。」

(7a)と(7b)は、YORU と TORU は、進行相と結果相を区別するということを示している。(工藤 1995: 262) YORU と TORU のアスペクト機能における相違のように、両形式の間には機能対立がある。

九州諸方言のアスペクト形式にも YORU と TORU の2形式が存在するが、両形式のアスペクト機能には曖昧性がある。(8)は、福岡県北九州市方言の話者による発話例である。

- (8) (どこからか鳥の鳴き声が聞こえて。)  
ドッカデ トリガ ナキヨルヨ。 / ナイトルヨ。  
「どこかで鳥が鳴いているよ。」

(8)は、YORU と TORU は、進行相を標示するということを示している。YORU と TORU のアスペクト機能における曖昧性のように、両形式の間には機能重複がある。また、YORU と TORU の機能重複と並行的に、福岡県北九州市方言の YORU には、証拠性 (evidentiality) のムード機能が生じている。(9)は、福岡県北九州市方言の話者による発話例である。

- (9) (目の前で太郎（赤ちゃん）が泣いているのを見て。)  
タローチャンガ ナキヨルヨ。 / ?ナイトルヨ。  
「太郎ちゃんが泣いているよ。」

(9)は、進行相における YORU は、証拠性を標示するということを示している。(木部 2019: 43)

工藤 (2014)は、西日本諸方言における YORU のムード化と TORU への一本化を次のように整理している。まず、愛媛県宇和島市方言の現象が示すように、YORU と TORU は、機能対立を成すアスペクト形式であった。次に、TORU が進行相のアスペクト機能を獲得し、YORU と TORU の間で機能重複が生じる。そして、福岡県北九州市方言の現象が示すように、YORU の方が証拠性のムード機能を獲得した。つまり、YORU のムード化は、TORU へ

---

<sup>2</sup> *-jor-u* には、[-jooru], [-joo], [-juu]など、*-tor-u* には、[-tooru], [-too], [-teuu]などの音形バリエーションがある。本研究では、議論の便宜上、*-jor-u* の音形を YORU、*-tor-u* の音形を TORU、音形バリエーションのない *-te=(i)-ru* を TERU として統一的に表記する。なお、発話例を提示する際には、各方言の音形に基づいた音韻表記を行う。

の一本化を動機に生じたということである。

西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化は、近畿中央方言によっても支持されているが、近畿中央方言におけるアスペクト形式の文法化は、中国語や西日本諸方言と大きく異なる<sup>3</sup>。近畿中央方言には、YORU, TORU, TERU の 3 形式が存在するが、TORU と TERU が進行相と結果相を標示するのに対して、YORU は、いずれのアスペクトも標示しない。(10)は、大阪方言の話者による発話例である。

(10) a. 犬，鳴いてる。 / #鳴いとる。 / \*鳴きよる。

「犬（が）鳴いている。」

b. 車，止めてる。 / #止めとる。 / \*止めよる。

「車（を）止めている。」

(10a)と(10b)は、TORU と TERU は、進行相と結果相を標示するということを示している。TORU と TERU のアスペクト機能における曖昧性のように、両形式の間には機能重複がある。ただし、TORU は、聞き手に対するぞんざい性 (rudeness)も標示するため、語用論的にはTERU と対立している。(井上 1998: 154) 一方、アスペクト機能のないYORU は、卑罵性 (pejorativeness)を標示する。(11)は、大阪方言の話者による発話例である。

(11) 仕事もしないくせに，飯ばかり，食いよる。

「仕事もしないくせに，飯ばかり，食ってやがる。」

(11)は、YORU は、卑罵性を標示するための待遇形式であるということを示している。(井上 1998: 153)

井上 (1998)は、近畿中央方言における YORU の文法化を次のように整理している。まず、歴史的資料によれば、近畿中央方言では、存在動詞「オル」を本動詞とする YORU と TORU、存在動詞「イル」を本動詞とする TERU の 3 形式が併用されていた。次に、存在動詞「アル」を本動詞とする形式が、上位者への待遇機能を獲得したのに対して、存在動詞オルを本動詞とする YORU と TORU は、下位者への待遇機能を獲得した。そして、大阪方言の現象が示すように、形態素「テ (-te-)」を介する TORU と TERU がアスペクト形式として定着し、アスペクト機能を失った YORU は、待遇形式として定着した。つまり、YORU の文法化は、アスペクト形式の機能重複を動機に生じたということである。

## 2. 研究課題

前述の通り、アスペクト形式の文法化は通言語的に観察されるが、文法化の内容は、中国語のような事実確認や西日本諸方言のような証拠性に向かうムード化と、近畿中央方言のような卑罵性に向かう待遇化に分岐している。TAM の階層構造より、アスペクトと関係の

---

<sup>3</sup> 京阪式アクセントを指標として、大阪市、京都市およびその周辺部で使用されている方言のことを「近畿中央方言」という。他の西日本諸方言と異なり、近畿中央方言のアスペクト形式は待遇的な意味を標示するため、日本語のアスペクト研究の中でも個別に発展してきた。また、近畿中央方言は、江戸時代後期までの中央語であったことから、他の諸方言よりも歴史的資料が豊富にあり、通時的研究も活発に行われてきた。(cf. 中井 2002, 金水 2006, 青木 2010)

あるムード化は順当であるが、アスペクトと関係のない待遇化は不可解である。なお、タルミ語やマラヤーラム語などのドラヴィダ諸語にも、日本語と同様の待遇形式は存在するが、待遇研究が活発に行われている日本語でさえ、卑罵性に関する理論的研究は、全く行われていない。(cf. Abbi & Gopalakrishnan 1991, 影山 2021)

## 2.1. 問題提起

近畿中央方言における YORU の待遇化は、本研究の調査結果によっても支持される。次に示すように、近畿中央方言に隣接する京都府福知山市方言の YORU は将然相 (prospective) のアスペクトを標示する<sup>4</sup>。(12)は、京都府福知山市方言の話者による発話例である<sup>5</sup>。

(12) a. taroo niku jaki=joru.

太郎 肉 焼く=PROSP.NPST

「太郎 (が) 肉 (を) 焼こうとしている。」

b. taroo niku jaki=jotta.

太郎 肉 焼く=PROSP.PST

「太郎 (が) 肉 (を) 焼こうとしていた。」

(12a)と(12b)は、YORU は、将然相を標示するということを示している。また、YORU のタ形 (=jotta)は、ル形 (=joru)と同様、将然相のような非完結相 (imperfective)を標示することからも、京都府福知山市方言の YORU は、アスペクト形式であるということが分かる。一方、近畿中央方言に所属する京都府京都市方言の YORU は、卑罵性を標示する。(13)は、京都府京都市方言の話者による発話例である<sup>6</sup>。

(13) a. taroo niku jaki=joru.

太郎 肉 焼く=PJR.NPST

「太郎 (が) 肉 (を) 焼きやがる。」

b. taroo niku jaki=jotta.

太郎 肉 焼く=PJR.PRF

「太郎 (が) 肉 (を) 焼きやがった。」

(13a)と(13b)は、YORU は、卑罵性を標示するための待遇形式であるということを示している。また、YORU のタ形は、将然相のような非完結相を標示しないことから (cf. \*焼きやがろうとしていた)、京都府京都市方言の YORU は、京都府福知山市方言の YORU と異なり、非アスペクト形式であるということが分かる。

さらに、次に示すように、近畿中央方言の YORU には、1 人称主語、2 人称主語の文脈に

---

<sup>4</sup> 将然相とは、直後開始し得る局面に関連している現在の局面のことである。(Comrie 1976: 64-65) 例えば、「太郎が魚を食べようとしている」や「太郎が椅子に座ろうとしている」のような局面が、将然相に該当する。西日本諸方言の YORU には、進行相に限らず、将然相を標示するアスペクト機能もある。(工藤 1995: 273) しかし、「太郎が椅子に座りよる」のような表現を将然相として分析するのか、進行相として分析するのかは、研究者によって異なる。(cf. 金水 1995, 黒木 2018)

<sup>5</sup> 京都府福知山市出身の高年層話者 3 名を対象に行ったインタビュー調査の結果に基づく。

<sup>6</sup> 京都府京都市出身の高年層話者 3 名を対象に行ったインタビュー調査の結果に基づく。

生起できないという制限がある。(14)は、京都府京都市方言の話者による発話例である<sup>7</sup>。

(14) a. \*ore niku jaki=joru.

1SG 肉 焼く=PJR.NPST

「俺（が）肉（を）焼きやがる。」

b. \*omae niku jaki=joru ?

2SG 肉 焼く=PJR.NPST

「お前（が）肉（を）焼きやがる？」

c. aitsu niku jaki=joru.

3SG 肉 焼く=PJR.NPST

「あいつ（が）肉（を）焼きやがる。」

(14a), (14b), (14c)は、YORU は、3 人称主語の文脈に限り、卑罵性を標示するということを示している。YORU が3 人称の制限を受けていることから、近畿中央方言の YORU は、非アスペクト形式であるということが分かる。

前述の特徴に基づけば、近畿中央方言の YORU は、アスペクト形式から待遇形式へと文法化していると言える。本研究では、近畿中央方言における YORU の文法化は、なぜ、アスペクトと関係のある事実確認や証拠性ではなく、アスペクトと関係のない卑罵性に向かって待遇化したのだろうかという問題を提起する。

## 2.2. ランキング仮説

本研究では、近畿中央方言における YORU の待遇化について、次の仮説に基づいた説明を試みる。

(15) ランキング仮説

アスペクト形式の待遇化は、形式の機能重複と形式への評価を動機に生じる。

(15)は、アスペクト形式の待遇化は、前述の中国語と日本語のように、一方のアスペクト形式にある機能が、他方のアスペクト形式にもあることを動機に生じるという仮説である。また、アスペクト形式の待遇化は、話者の発話スタイルに基づいたアスペクト形式への評価を動機に生じるという仮説である。本研究では、これを「待遇価」と呼ぶ。

まず、ある言語体系内において、機能重複のある形式が x, y, z のように複数存在する場合、各形式は、High-Low のような待遇価に基づいてランキングされていると仮定する。

表1 待遇価に基づく形式のランキング

待遇価	形式
High	x
	y
Low	z

<sup>7</sup> 京都府京都市出身の高年層話者 3 名を対象に行ったインタビュー調査の結果に基づく。

表 1 より，形式 x, y, z が同じ意味を標示する場合，待遇的に，最もフォーマルな発話場面で使用される形式 x は High，最もカジュアルな発話場面で使用される形式 z は Low，中間で使用される形式 y は High と Low の間にランキングされる。次に，(16)に示すように，従来の研究成果に基づいて，形式 x には TERU，形式 y には TORU，形式 z には YORU を導入する。

- (16) a. TERU は標準語テイルの縮約形である。真田 (2007: 5)によれば，標準語形は，フォーマルな発話場面で使用される。この 2 点に基づいて，TERU を High の形式 x に導入する。
- b. TORU は非標準語である。井上 (1998: 154)と中井 (2012: 58)によれば，TORU にはぞんざい性（軽卑）の意味がある。この 2 点に基づいて，TORU を TERU よりも Low，YORU よりも High の形式 y に導入する。
- c. YORU は非標準語である。井上 (1998: 153)と西尾 (2015: 85 )によれば，YORU には卑罵の意味がある。この 2 点に基づいて，YORU を Low の形式 z に導入する。

また，複数のアスペクト形式の間に機能重複がある場合，待遇性を帯びないアスペクト形式と待遇性を帯びるアスペクト形式の間で，語用論的な対立が生じ得ると仮定する。本研究では，前者を「基本形式」，後者を「非基本形式」，話し手と聞き手の間で語用論的に解釈される待遇のことを「待遇解釈」と呼ぶ<sup>8</sup>。当該方言において，基本形式の数は必ず 1 形式であるとするれば，YORU，TORU，TERU のランキングと待遇解釈の関係は，表 2 のような階層を成す。

表2 アスペクト形式のランキングと待遇解釈の関係

待遇価	形式	方言 I	方言 II	方言 III
High	TERU	D	P	P
	TORU	R	D	P
Low	YORU	R	R	D

表 2 より，基本形式は D (default)，非基本形式のうち，ぞんざい性の待遇解釈がある形式は R (rude)，配慮性の待遇解釈がある形式は P (polite)である。本研究では，ポライトネス理論 (politeness theory)を参考に，カジュアルな発話場面における待遇解釈の内容を「ぞんざい性」，フォーマルな発話場面における待遇解釈の内容を「配慮性」と呼ぶ<sup>9</sup>。また，前者の素性として[±rude]，後者の素性として[±polite]を立て，分析を行う。なお，YORU，TORU，TERU のうち，いずれか 1 形式は，各方言における D であるため，西日本諸方言は，論理的に，

<sup>8</sup> 待遇解釈は，アスペクト形式の機能重複を前提に生じるため，あくまで二次的なものである。また，話し手と聞き手の間で解釈され得るという点で語用論的である。アスペクト形式自体に待遇機能はないという意味で，卑罵性などを標示する待遇形式の待遇機能とは性質が異なる。

<sup>9</sup> 話し手と聞き手が，互いに良好な関係を保つために行う言語的配慮のことをポライトネスという。ポライトネスは，特定の形式によって標示される敬意などの意味を指す場合もあれば，話し手と聞き手の間で生じる配慮などの心的概念を指す場合もある。(cf. Brown & Levinson 1987)



方言Ⅰ，方言Ⅱ，方言Ⅲの3タイプに分類することができる。

本仮説は、複数のアスペクト形式の間に機能重複がある場合、アスペクト形式のランキングに基づけば、D と対立する非基本形式に生じる待遇解釈の内容を把握できるというものである。つまり、当該方言における D [-rude, -polite]を基準として、D よりも待遇価が Low の非基本形式には R [+rude, -polite]の待遇解釈、D よりも待遇価が High の非基本形式には P [-rude, +polite]の待遇解釈があるということである。本研究では、アスペクト形式の待遇化プロセスには、前述のようなアスペクト形式のランキングに基づく待遇解釈が存在しているということを提案する。なお、本仮説は、言語経済の原理 (Martinet 1962)、アスペクト形式の文法化の動機 (井上 1998, 沈 2008, 工藤 2014)、方言話者の発話スタイル理論 (真田 2007) より着想を得ている<sup>10</sup>。

本仮説は、従来の研究において説明不十分であったアスペクト形式の文法化と待遇の関係を理論的に説明するものである。本仮説が妥当であれば、待遇価が Low のアスペクト形式は、R の待遇解釈を獲得した後、卑罵性に向かって待遇化するということを提案できる。ここで、近畿中央方言における YORU の文法化は、なぜ、アスペクトと関係のある事実確認や証拠性ではなく、アスペクトと関係のない卑罵性に向かって待遇化したのだろうかという問題に解答することができる。つまり、YORU は、アスペクト形式の段階で、最も待遇価の低い Low にランキングされているため、卑罵性への待遇化が生じるということである。

### 2.3. 研究方法

本研究では、YORU, TORU, TERU のアスペクト機能を分析するための方法論として、2種類の事態を設定する<sup>11</sup>。まず、時間の経過に伴い、将然相 >> 進行相 >> 結果相を順行し、変化していく事態を「事態 α」と呼ぶ。例えば、「魚を食べる」という事態は、「食卓に着く >> 魚を口へ運び、咀嚼する >> 魚を食べ終え、骨が残る」というように変化していく。また、時間の経過に伴い、将然相 >> 結果相を順行し、変化していく事態を「事態 β」と呼ぶ。例えば、「椅子に座る」という事態は、「椅子の前に立ち、膝を曲げる >> 椅子にお尻がつき、姿勢が安定する」というように変化していく。本研究では、このような2種類の事態をデータ分析の枠組みとして設定する。

また、本研究では、インフォーマントへのインタビュー調査を実施するが、方言区画という地理的バリエーションと年齢という時間的バリエーションを網羅するために、標本調査の方法論をデータ収集の枠組みとして設定する。本研究におけるインフォーマントは、外住歴が合計5年未満の高年層(70歳)、中年層(40-69歳)、若年層(18-39歳)の方言話者である。各方言のインフォーマント数を表3に示す。

---

<sup>10</sup> 方言話者は、発話場面に応じて、言語体系の切り替え (code switching)を行う。例えば、方言話者は、カジュアルな場面 (Low)では方言を使用するが、フォーマルな場面 (High)では標準語を使用するというような発話スタイルを形成している。また、方言と標準語の接触によって、方言の影響を受けた標準語(新方言)や標準語の影響を受けた方言(ネオ方言)が生じ、新たな発話スタイルが形成されることもある。(真田 2007: 1-4)

<sup>11</sup> 時間構造に基づいて動詞分類を行った金田一 (1950)と Vendler (1967)を参考にすれば、事態の時間構造は、継続的なものと瞬間的なものに大別することができる。

表3 各方言のインフォーマント数

府県	方言	高年層	中年層	若年層	合計
大阪府	大阪方言	24	19	39	82
京都府	山城方言	5	13	17	35
	丹波方言	5	5	5	15
	丹後方言	7	5	5	17
滋賀県	滋賀方言	17	15	46	78
奈良県	北部方言	15	12	24	51
	南部方言	6	7	6	19
兵庫県	摂津播磨方言	11	12	16	39
	淡路方言	6	5	5	16
	但馬方言	6	4	7	17
	丹波方言	4	3	5	12
三重県	北部方言	17	13	18	48
	南部方言	10	10	9	29
岡山県	岡山方言	20	20	20	60
島根県	出雲隠岐方言	15	12	15	42
	石見方言	6	6	8	20
鳥取県	東部方言	12	10	15	37
	西伯耆方言	5	5	5	15
広島県	広島方言	17	24	14	55
山口県	山口方言	21	20	24	65
高知県	高知方言	16	14	20	50
徳島県	徳島方言	31	36	37	104
愛知県	愛知方言	16	27	47	90
岐阜県	飛騨方言	6	6	6	18
	美濃方言	8	10	11	29
長野県	北部方言	20	17	24	61
	南部方言	5	5	5	15
福井県	嶺南方言	8	8	11	27
	嶺北西部方言	7	9	17	33
	嶺北東部方言	7	8	8	23
合計		353	360	489	1202

本研究では、まず、先行研究の方言区画を参考に、第一段階のデータ収集を行い、方言区画による方言差を観察した<sup>12</sup>。次に、第一段階のデータ収集の結果に基づいて、方言差が観察されない方言区画を統合し、第二段階のデータ収集を行った。表3は、第二段階のデータ収集の結果に基づいている。

3. アスペクト形式の機能重複における類型

本稿では、アスペクト体系の個別データの提示を割愛し、表3の30方言のデータに基づいて、事態 $\alpha$ と事態 $\beta$ における機能重複の類型を提示する<sup>13</sup>。なお、表4と表5では、YORU, TORU, TERUのような特定の形式や機能重複のある形式の数を考慮せず、機能重複なしを0、機能重複ありを1とする。

表4 事態 $\alpha$ における機能重複の類型

A			B			C		
PROSP	PROG	RES	PROSP	PROG	RES	PROSP	PROG	RES
0	1	0	1	1	0	0	1	1
奈良県_南部方言			岡山県_岡山方言			大阪府_大阪方言		
兵庫県_摂津播磨方言						京都府_山城方言		
兵庫県_淡路方言						滋賀県_滋賀方言		
兵庫県_但馬方言						奈良県_北部方言		
兵庫県_丹波方言						三重県_北部方言		
鳥取県_東部方言						三重県_南部方言		
広島県_広島方言						島根県_出雲隠岐方言		
山口県_山口方言						島根県_石見方言		
徳島県_徳島方言						愛知県_愛知方言		
岐阜県_飛騨方言						岐阜県_美濃方言		
						長野県_南部方言		
						福井県_嶺南方言		
						福井県_嶺北西部方言		

表4より、事態 $\alpha$ において、Aは、複数のアスペクト形式に、進行相を標示する機能がある場合に機能重複が生じるタイプを示している。Bは、複数のアスペクト形式に、将然相と進行相を標示する機能がある場合に機能重複が生じるタイプを示している。Cは、複数のアスペクト形式に、進行相と結果相を標示する機能がある場合に機能重複が生じるタイプを示している。

<sup>12</sup> 本研究では、方言区画によるアスペクト体系の相違を方言差として扱う。  
<sup>13</sup> 研究方法の詳細とアスペクト体系の個別データに関しては、鴨井 (2023)を参照。

表5 事態  $\beta$  における機能重複の類型

PROSP	RES
0	1
大阪府_大阪方言	
京都府_山城方言	
滋賀県_滋賀方言	
奈良県_北部方言	
三重県_北部方言	
三重県_南部方言	
島根県_出雲隠岐方言	
島根県_石見方言	
愛知県_愛知方言	
岐阜県_美濃方言	
長野県_南部方言	
福井県_嶺南方言	
福井県_嶺北西部方言	

表5は、事態  $\beta$  において、複数のアスペクト形式に、結果相を標示する機能がある場合に機能重複が生じるタイプを示している。このタイプには、事態  $\alpha$  における C と同様の諸方言が該当する。

一方、機能重複は、1つのアスペクト形式が1つのアスペクトを標示する場合には生じない。このタイプには、表6の諸方言が該当する。

表6 機能重複が生じない諸方言

京都府_丹波方言
京都府_丹後方言
鳥取県_西伯耆方言
高知県_高知方言
長野県_北部方言
福井県_嶺北東部方言

#### 4. アスペクト形式の待遇解釈

アスペクト形式の機能重複における類型に基づけば、YORU, TORU, TERU の3形式に機能重複がある方言、YORU と TORU の2形式に機能重複がある方言、TORU と TERU の2形式に機能重複がある方言の3タイプが存在する。本仮説が妥当であれば、一方の形式は基本形式 D [-rude, -polite], 他方の形式は非基本形式である。また、非基本形式には、ランキ

ングに基づく R [+rude, -polite]もしくは P [-rude, +polite]の待遇解釈があり得る。本稿では、後者 2 タイプのデータの提示を割愛し、YORU, TORU, TERU の 3 形式に機能重複がある島根県\_石見方言のデータを提示する<sup>14</sup>。

進行相と結果相におけるアスペクト形式の機能重複がある諸方言のうち、島根県\_石見方言は、TORU を D としているため、TERU には P, YORU には R の待遇解釈があり得る。(17)は、進行相における島根県\_石見方言の若年層話者による聞き手目当ての発話例である<sup>15</sup>。

(17) a. (バーベキューでの調理中、疎遠者に話しかけられて。)

ima niku ?jaki=joru. / ?jai=toru. / jai=teru.

今 肉 焼く=PROG.RUD.NPST / 焼く=PROG.NPST / 焼く=PROG.POL.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

b. (バーベキューでの調理中、親近者に話しかけられて。)

ima niku jaki=joru. / ?jai=toru. / ?jai=teru.

今 肉 焼く=PROG.RUD.NPST / 焼く=PROG.NPST / 焼く=PROG.POL.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

c. (バーベキューでの調理中、疎遠者・親近者以外に話しかけられて。)

ima niku ?jaki=joru. / jai=toru. / ?jai=teru.

今 肉 焼く=PROG.RUD.NPST / 焼く=PROG.NPST / 焼く=PROG.POL.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

(17a), (17b), (17c)は、YORU, TORU, TERU は、進行相を標示するが、聞き手が P もしくは R の対象となり得る環境であれば、3 形式の間では、P と R の待遇解釈による対立が生じるということを示している。

また、(18)は、結果相における島根県\_石見方言の若年層話者による聞き手目当ての発話例である。

(18) a. (待ち合わせでの待機中、疎遠者から電話がかかってきて。)

moo seki \*suwari=joru. / ?suwat=toru. / suwat=teru.

もう 席 座る=PROSP.NPST / 座る=RES.NPST / 座る=RES.POL.NPST

「(私は) もう, 席 (に) 座っている。」

b. (待ち合わせでの待機中、親近者から電話がかかってきて。)

moo seki \*suwari=joru. / suwat=toru. / ?suwat=teru.

もう 席 座る=PROSP.NPST / 座る=RES.NPST / 座る=RES.POL.NPST

「(私は) もう, 席 (に) 座っている。」

<sup>14</sup> 後者 2 タイプのデータに関しては、鴨井 (2023)を参照。

<sup>15</sup> 提示する発話例に関して、1 段目は各聞き手と対応する発話場面、2 段目は形態素解析を行わない簡易の音韻表記、3 段目はグロス、4 段目は標準語訳である。聞き手目当ての発話例であるため、グロスには、RUD: rude (ぞんざい) と POL: polite (配慮) を追加する。なお、P の対象となり得る聞き手には、話し手にとっての疎遠者 (e.g. 初対面, 顔見知り) が該当し、R の対象となり得る聞き手には、話し手にとっての親近者や目下 (e.g. 母親, 部下) が該当する。

c. (待ち合わせでの待機中, 疎遠者・親近者以外から電話がかかってきて。)

moo seki \*suwari=joru. / suwat=toru. / ?suwat=teru.

もう 席 座る=PROSP.NPST / 座る=RES.NPST / 座る=RES.POL.NPST

「(私は) もう, 席 (に) 座っている。」

(18a), (18b), (18c)は, TORU と TERU は, 結果相を標示するが, 聞き手が P の対象となり得る環境であれば, 2 形式の間では, P の待遇解釈による対立が生じるということを示している。一方, YORU は, 結果相を標示しないため, 聞き手が R の対象となり得る環境であっても, 3 形式の間では, R の待遇解釈による対立は生じないということを示している。表 7 に示すように, TORU を D としている島根県\_石見方言は, 本仮説の方言 II に該当する。

表7 島根県\_石見方言におけるアスペクト形式のランキングと待遇解釈の関係

待遇価	形式	島根県_石見
High	TERU	P
	TORU	D
Low	YORU	R

一方, アスペクト形式の間に機能重複がない場合は, いずれも D であるため, 待遇解釈による対立は生じない。(19)と(20)は, 進行相における高知県\_高知方言の若年層話者による聞き手目当ての発話例である。

(19) a. (バーベキューでの調理中, 疎遠者に話しかけられて。)

ima niku jaki=juu. / \*jai=teuu.

今 肉 焼く=PROG.NPST / 焼く=RES.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

b. (バーベキューでの調理中, 疎遠者以外に話しかけられて。)

ima niku jaki=juu. / \*jai=teuu.

今 肉 焼く=PROG.NPST / 焼く=RES.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

(20) a. (バーベキューでの調理中, 目下に話しかけられて。)

ima niku jaki=juu. / \*jai=teuu.

今 肉 焼く=PROG.NPST / 焼く=RES.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

b. (バーベキューでの調理中, 目下以外に話しかけられて。)

ima niku jaki=juu. / \*jai=teuu.

今 肉 焼く=PROG.NPST / 焼く=RES.NPST

「(私は) 今, 肉 (を) 焼いている。」

(19)と(20)は, YORU は進行相を標示するが, TORU は進行相を標示しないため, 聞き手が P あるいは R の対象となり得る環境であっても, 2 形式の間では, 待遇解釈による対立は生

じないということを示している。高知県\_高知方言に限らず、非基本形式による待遇解釈は、アスペクト形式の機能重複が生じない表 6 の諸方言からは観察されない。以上の諸方言に基づく機能重複と待遇解釈の関係は、本仮説の妥当性を支持している。

### 5. 結論と考察

本仮説は、複数のアスペクト形式の間に機能重複がある場合、アスペクト形式のランキングに基づけば、D と対立する非基本形式に生じる待遇解釈の内容を把握できるというものである。前述の方言データに基づけば、西日本諸方言における YORU, TORU, TERU のランキングと待遇解釈の関係は、表 8 のような階層を成す。

表8 西日本諸方言におけるアスペクト形式のランキングと待遇解釈の関係

待遇価	形式	方言I	方言II			方言III
		近畿中央	鳥取県_東部	島根県_石見	近畿以東	近畿以西
High	TERU	D		P	P	
	TORU	R	D	D	D	P
Low	YORU		R	R		D

表 8 より、第一に、方言IIには、TERU を D としている近畿中央方言が該当する<sup>16</sup>。近畿中央方言において、TERU よりも待遇価が Low の TORU には R の待遇解釈があり得る。第二に、方言IIIには、TORU を D としている鳥取県\_東部方言、島根県\_石見方言、近畿以東方言が該当する<sup>17</sup>。これらの方言において、TORU よりも待遇価が High の TERU には P の待遇解釈があり得る。また、TORU よりも待遇価が Low の YORU には R の待遇解釈があり得る。第三に、方言IIIには、YORU を D としている近畿以西方言が該当する<sup>18</sup>。近畿以西方言において、YORU よりも待遇価が High の TORU には P の待遇解釈があり得る。

基本形式と非基本形式の待遇解釈による対立は、アスペクト形式の機能重複を前提として、話し手と聞き手の間で生じる語用論的な対立である。本研究では、アスペクト形式の待遇化プロセスには、前述のようなアスペクト形式のランキングに基づく待遇解釈が存在しているということを提案する。ここで、近畿中央方言における YORU の文法化は、なぜ、アスペクトと関係のある事実確認や証拠性ではなく、アスペクトと関係のない卑罵性に向かって待遇化したのだろうかという問題に解答することができる。つまり、YORU は、アスペクト形式の段階で、最も待遇価の低い Low にランキングされているため、卑罵性への待遇化が生じるということである。本仮説は、従来の研究において説明不十分であったアスペクト形式の文法化と待遇の関係を理論的に説明するものである。

<sup>16</sup> 表 8 における「近畿中央方言」は、大阪府\_大阪方言、京都府\_山城方言、滋賀県\_滋賀方言、奈良県\_北部方言、福井県\_嶺北西部方言の 5 方言である。

<sup>17</sup> 表 8 における「近畿以東方言」は、三重県\_北部方言、三重県\_南部方言、島根県\_出雲隠岐方言、愛知県\_愛知方言、岐阜県\_美濃方言、長野県\_南部方言、福井県\_嶺南方言の 7 方言である。

<sup>18</sup> 表 8 における「近畿以西方言」は、奈良県\_南部方言、岡山県\_岡山方言、広島県\_広島方言の 3 方言である。

アスペクト形式の文法化において、アスペクト形式の機能重複という動機には、普遍性があると考えられる。一方、アスペクト形式の文法化において、ムード化と待遇化という多様性には、2つの階層構造が関わっていると考えられる。つまり、アスペクトと関係のある事実確認や証拠性へのムード化は、TAMの階層構造に基づいて生じるが、アスペクトと関係のない卑罵性への待遇化は、TAP (Tense, Aspect, Politeness)の階層構造に基づいて生じることである<sup>19</sup>。

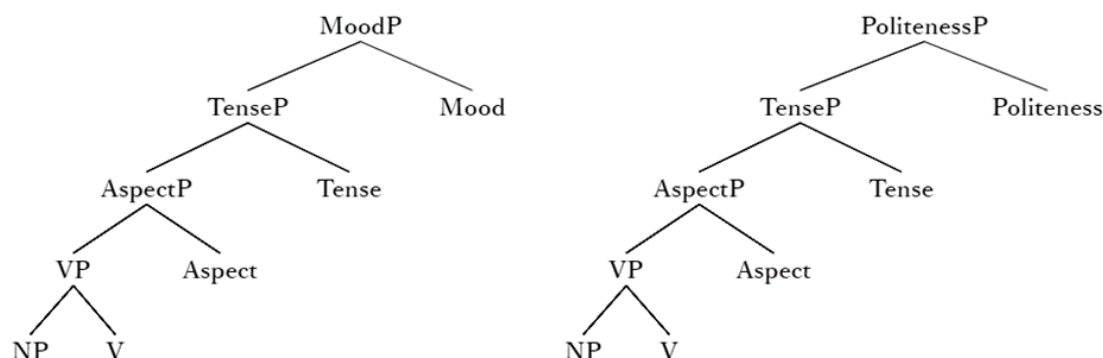


図1 TAMの階層構造とTAPの階層構造

図1より、アスペクト形式の文法化は一方向的であるが、階層構造の相違によってムード化と待遇化のような分岐が生じると考えられる。また、階層構造の相違は、ムードのような事態内容を重視するのか、待遇のような対人関係を重視するのかという言語背景の相違によって生じたと考える。日本語の場合、尊敬や卑罵などの待遇形式が豊富に存在することからも、対人関係を重視する言語であるということが窺える。待遇価に基づく形式のランキングは、このような対人関係を重視する言語的背景から、必然的に生じたものであると考える。なお、待遇価に基づく形式のランキングがない限りは、TAMの階層構造に基づくムード化が生じると推測できるが、言語変化の普遍性から見れば、日本語におけるアスペクト形式の文法化がムード化と待遇化に分岐するという現象は、依然として不可解である。これについては、日本語諸方言の全体像を把握し、本研究をさらに研究を発展させていく必要がある。

## 略号

1: first person (1人称) / 2: second person (2人称) / 3: third person (3人称)

GEN: genitive (属格) / NPST: non-past (非過去) / PJR: pejorative (卑罵) / POL: polite (配慮)

PRF: perfect (完了相) / PROG: progressive (進行相) / PROSP: prospective (将然相)

PST: past (過去) / RES: resultative (結果相) / RUD: rude (ぞんざい)

SFP: sentence final particle (文末助詞) / SG: singular (単数)

<sup>19</sup> 日本語には、敬語 (honorifics) という文法カテゴリーに基づいて、特定の形式が尊敬形式へと変化する敬語化が存在する。一方、卑罵性という文法カテゴリーは設けられていないが、本研究では、待遇性 (politeness) という文法カテゴリーを設けることで、敬語と同様、卑罵性を1つの文法カテゴリーとして扱う。(cf. Harada 1976)



## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの方言話者の方々に、多大なるご協力を賜っております。ここに記して、心より感謝申し上げます。なお、本研究は、下記の助成を受けています。

-JSPS 科研費 JP23KJ2152

-JSPS 科研費 JP19H01261 (研究代表者：沈力)

-同志社大学言語生態科学研究センター

## 参 考 文 献

- Abbi, Anvita and Devi Gopalakrishnan (1991) "Semantics of explicator compound verbs in South Asian Languages," *Language Sciences*. 13 (2), pp.161-180.
- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』 ひつじ書房.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness*. Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. and Perkins, Revere and Pagliuca, William (1994) *The evolution of grammar: Tense, aspect and modality in the languages of the world*. University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.
- Harada, Shin-Ichi (1976) "Honorifics," M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. pp.499-561.
- Hopper, Paul J and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』 秋山書店.
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学－言語類型から見えた日本語の本質－』 くろしお出版.
- 鴨井修平 (2023) 「西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化－2つの動機に基づく待遇化プロセス－」 同志社大学博士論文.
- 木部暢子 (2019) 「奄美・沖縄の言語研究から－奄美方言のエビデンシャリティー－」 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』 5, pp.33-46.
- 金田一春彦 (1950) 「國語動詞の一分類」 『言語研究』 15, pp.48-63.
- 金水敏 (1995) 「いわゆる「進行態」について」 『築島裕博士古稀記念 国語学論集』 pp.169-197.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』 ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房.
- 黒木邦彦 (2018) 「市来・串木野方言の静態化体系」 『バリエーションの中の日本語史』 pp.45-67.
- Martinet, André (1962) *A functional view of language*. Clarendon Press.
- 中井精一 (2002) 「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」・「トル」の待遇化について」 『国語学彙史の研究』 21, pp.236-252.
- 中井精一 (2012) 『都市言語の形成と地域特性』 和泉書院.
- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動－対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮－』 くろしお出版.
- 真田信治 (2007) 「発話スタイルと方言」 『シリーズ方言学 3－方言の機能－』 pp.1-25.
- 沈力 (2008) 「語気助詞 ZHE2 的来源－晋方言与北京方言的比較－」 『晋方言研究－第三届晋方言国際学術研究会論文集－』 pp.223-232.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.